
俺と私を記憶がつなく～忘却された記憶～

神木 輝羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と私を記憶がつなぐ〜忘却された記憶〜

【Nコード】

N2855V

【作者名】

神木 輝羅

【あらすじ】

「幼い頃から繰り返し見る謎の夢があった……」
姫ローゼンティアは16歳の誕生日が近づいたある日、側近をつける事になった。

彼との出会いで運命の歯車が回りだす！！

記憶がつなぐ物語の第一弾、のろのろ更新中。

プロローグ

私は男と腕を組んで歩いていった。

暖かな光が照らす小道をゆっくり、ゆっくりと……

そのひと時は、永遠に思われるほどに幸福な時だった。

しかし、一瞬で景色が変わり、私たちは薄暗い森の中にいた。

彼は刀を持ち、どこかへ向かおうとしていた。

引き留めようとするが、声が出ない。

だんだん視界が暗くなり、何も見えなくなった……

現実に引き戻されるように、私は目を覚ました。

これは、幼い頃から繰り返して見る夢だ。いつも決まって相手の顔が見えなくて、最後に真っ暗な森に一人取り残されて終わる。

この夢が何を意味するか私を知るのはまだ先のことだ。

私が忘れていたことは、決して忘れてはいけなかった。

第1話 姫と側近

そう、あれは庭の花の蕾は膨らみ始めた、冬の終わりだった。

私はいつも通り午後のティータイムを楽しんでいたら、突然お父様が部屋に入って来たのだ。

「お父様、どうかしたのですか」

「今日はお前に大事な話があつて」

お父様は深刻な顔をしていた。

「とりあえずお茶でもいかがですか？」

「ん、ああ。頂こう」

お父様はお茶を一口飲んでから再び話しました。

「実はお前に側近をつけようと思つ」

「側近？」

「そうだ。側近兼護衛になる人間を一人つけよう」
私は首を傾げる。

「何故、突然そのようなことを……」

「お前が16歳になるからだ。」

お父様が言った言葉の意味が私には、はっきり理解できた。

私は昔、出かけた先で内乱に巻き込まれたことがある。幼い私のトラウマになったし、お父様も心配して、私は城から出る事が少なくなった。世話をする使用人も信頼できる限られた者にしてきた。だが、私はもうすぐ16歳になる。この国では成人の歳だ。もう城に籠りきりで居るわけにはいかない。王女としていろんな場所に行かなければならないのだ。

だから、私の側に居て常に守ってくれる人間が必要なのだ。

そして、誕生日まで残り1か月となった今日、私の所に一人の側近がやってきた。

「初めまして、リンナ・バレットと申します」

近衛兵の服を着た金髪の青年だった。歳は19らしい。

ふと、妙な懐かしさを感じた。しかし、それはすぐに消えた。

「ローゼンティア・ウィル・フェルトスよ。これから宜しくね」
そう言って手を差し出すと、彼はゆっくりと握り返してくれた。

「はい、こちらこそ宜しく願います、ローゼンティア様」

「ロゼでいいわ」

「分かりました、ロゼ様」

リンナはにつこり微笑んだ。

「とりあえず……城内でも案内しようか？まだきちんとして見て回って無いんでしょう？」

「では、是非」

「あつちが大広間で、こっちは薔薇園。まだ外は寒いわね」

「そうですね。もうすぐ春といってもまだまだ風は冷たいですから」

外に面した通路を歩く私たちに、ひゅう、と北風が吹き付ける。

「あ、でもこの城には外なのにいつでも暖かい場所があるの」

私はリンナを連れて、薔薇園のわきにある狭い小道に入って行く。

しばらく、狭い道を進んだ先にあるのは小さな庭園だ。

「此処は？」

まだ寒い時期であるのに花が咲き乱れている光景にリンナは驚いた顔した。

「魔法の力で春の気候にしてあるから一年中花が咲いてて暖かいの」

私は芝生の上に寝そべる。

暖かな気温に次第にまぶたが重くなっていく。

『……必ず追いつくから』

誰？……顔がよく見えない。

『大丈夫。俺、強いから』

どづして、こんなにも苦しいの？

「……様」

誰かが呼んでいる。

「ロゼ様！」

目を開けると心配そうな顔をしたリンナがいた。

どうやら眠ってしまったようだ。

「大丈夫ですか？うなされていましたよ」

「ええ、夢を見たの。幼い頃から繰り返し見る夢」

すると彼は少し真面目な顔をした。

「いったいどんな夢なんですか」

「そうね……実際よく分からないの。男の人が居るの、顔はぼやけて見えないんだけど。それから凄く苦しくて悲しい気持ちになる」

そう、いつも、いつも苦しくて悲しい気持ちでいっぱいになる。

あの夢はいったい何なのだろう？

「夢には何か意味があるのかもしれないませんが、深く考えすぎてもいけません。さあ、暗くならないうちに戻りましょう」

そう言っリンナは笑ったが、何だか悲しそうに見えた。

「ロゼ様、側近さんとは仲良くできそうですかあ？」

夜、私の長く伸びた黒髪を梳かしていくれたメイドが尋ねてきた。独特の口調で話す彼女は、エア・テイカー。濃い黄色の髪をボブカットにした幼い頃から私に仕えている専属メイドだ。

「うん、大丈夫だと思う。話しやすかったし優しそうな人だったわ」

「それは良かったです。ロゼ様は人見知りだから心配したですよ
お」

エアはにつこと笑い、クシを机に置いた。

「それでは、お休みなさいませロゼ様」

そう言って、エアは部屋を出て行った。

リンナが来てから1週間がたった。彼は人付き合いが上手いのか城にもすぐに馴染んだ。ただ、どう言うわけかエアとだけは仲が悪いようなのだ。

朝、部屋から廊下に出ると不穏な空気が漂っていた。リンナとエアが火花を散らしながら睨み合っていたのだ。

「おはようございます、ロゼ様」

「よく眠れましたかあ」

二人が微笑みかけてきた。

「……二人とも何してるの？」

笑っているけど、二人の間にはやはり火花が散っている気がする。

「いえ、別に少し話をしていただけですよ」

「はい、世間話をしていただけですよ」

そう言いながらも二人の足元では地味な蹴り合いが繰り広げられている。

「それよりロゼ様、今日は王都の施設を視察に行く予定でしたね。」

「うん、そうだよ」

今日は私の数少ない公務がある日だ。成人に向けて少しずつ増やしていくらしい。

「そうですね、お出かけになるんですね。お気をつけて下さいねえ」

そう言ってエアは私に一礼して、さらにリンナを睨みつけてから立ち去って行った。何で二人こんなに仲が悪いのかさっぱり分からない。

「何でこんなに人がいるのよ」

施設に着き、馬車から降りた私を待っていたのは数えきれない大勢の人だった。

「そりゃ、今までめったに姿を現さなかった王女を一目見たいからでしょう。何よりロゼ様は有名ですから」

「有名？」

「はい。『大国フェルランドの姫ローゼンティアは城から出てこない引きこもりだ』っていろんな国で有名ですよ」

あまりにも爽やかな笑顔で言うリンナに怒りさえ覚えた。

施設に向かって歩いてみると大勢の人の中からナイフを持った男が私に向かって走ってきた。リンナは剣を抜きそれを軽々受け止める。

だが、それは囷だった。別の男が近くの建物からライフルで狙っていたのだ。放たれた弾丸が私に向かって飛んでくる。しかし、私に届く前に爆発した。

「ロゼ様！大丈夫ですか？」

リンナが駆け寄ってくる。

「ええ。……でもいったい何が…？」

驚いている私にリンナは微笑んだ。

「物質破壊、自分は稀人なのです」

稀人というのは、魔力を持った者の中に少数いる特殊な人間のことだ。こういった者達は魔力を持っているのに魔法が使えず、代わりにただ一つだけ特別な能力が使えるのだ。

男達はすぐさま警備兵に連れて行かれた。

それを眺めているとリンナが私の前で片膝をついた。

「自分の能力にも限界はありますが、かならず貴女を守り抜きます」

真っ直ぐ見つめてくる。

「この命に代えても」

その瞬間、夢で見た光景がよみがえる。

誰かと過ごした幸せな日々、そして悲しい別れ。

「……私はそんなの望まない。私より先に死な無いで！」

これは、私の心からの言葉だった。

リンナは驚いた顔をしたが、静かに

「はい」

と言った。

第1話 姫と側近（後書き）

やっと1話が出来ました。

のんびり更新していくつもりなので、気長に見守って下さい。

感想等ありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2855v/>

俺と私を記憶がつかなく～忘却された記憶～

2011年10月6日20時05分発行